



2021.3
第69号



一般社団法人
大学女性協会
東京支部会報

- TOMOSHIBI -
Journal of Tokyo Chapter
Japanese Association of
University Women
<http://www.jauw.org>

コロナ禍と東京支部活動

支部長 長谷川 瑞穂

2020年度は新型コロナウイルス(COVID-19)の蔓延で大変でしたが、東京支部は奨学金事業、会報「ともしび」68号、69号の発行、新ホームページの作成、オンライン会議システムも利用しての毎月の支部委員会などを行うことができました。

2020年度の本部の国内奨学生に東京支部推薦の4名が選ばれました。東京支部の国内奨学生には看護医療学部で学び直し、将来は保健師として地域に貢献したいという意欲的な学生を選び、1月23日にZOOMで奨学金授与式を行いました(写真)。東京支部国際奨学生には新たにミャンマーの学生1名を選びました。「ともしび」69号の特集は「私の先生」でしたが、多くの会員から貴重な原稿を頂きました。自著紹介のお二人共々、ご寄稿に感謝します。そして残念ですが、25年続いたサークル

オンライン(ZOOM)による奨学金授与式。右は登尾泉美さん



「源氏物語を読む会」がコロナ禍の影響もあり、閉会となりました。坂上講師の長年の貢献と会を支えて頂いた会員の皆様に敬意を表します。また、大学女性協会のホームページが更新され、東京支部は、写真を多く取り入れて楽しい雰囲気になりましたのでご覧下さい。

例年、支部総会や懇親会、講演会、見学会などで楽しく語らいながら過ごした有意義な時間が、ミヒヤエル・エンデの『モモ』の灰色の間泥棒に奪われたような2020年度でした。

さて、昨年1月以来、新型コロナウイルス感染症はあつという間にパンデミックとなり、いまだに終息の見通しはたっておりません。ウイルスは人類よりずっと古く、地球に生命が誕生した頃から進化を繰り返して来たかに生き続けてきましたが、毎日テレビ画面で見る「姿」が明らかになったのは、近年電子顕微鏡が発明された時期以降です。細胞分裂で増殖する細菌とは異なり、宿主に入って生き、生物と無生物の中間的な性質を持つとされています。「農地や居住地の造成のために熱帯雨林の開発が急ピッチで進み、人と野生動物の境界があいまいになった。このため、本来は人とは接触のなかった感染力の強い新興感染症が次々に出現している(石弘之『感染症の世界史』角川文庫P5)」にあるように、今回の新型コロナウイルス感染拡大は人災ともいえます。

コロナの問題と脱炭素化の環境問題は大きく関わっています。コロナ禍は一方でAI(人工知能)やIT(情報技術)の発達と急速な活用を促進させました。2021年度の東京支部の講演会活動は、これらの2大変化に対応し、6月頃にはAIに関するオンライン講演会を、秋には環境問題をテーマにした講演会を企画する予定です。是非ご参加下さい。

東京支部総会について

新型コロナウイルス感染拡大予防のため今年も会場での会合は行いません。会員の皆様には4月上旬に議案と議決権行使書を送付致します。同書に記載の期限までに回答の上ご返送ください。4月18日(日)に、皆様の議決権行使書をもち、支部委員での総会開催とします。総会報告は「ともしび」第70号に掲載の予定です。

最後に、新型コロナウイルス感染防止のため、東京支部総会は4月18日に支部委員と議決権行使書で開催することになりました。会員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。コロナが終息し、皆様と対面でお会いできる日を楽しみに致しております。



「水仙」水墨画 東京支部会員作

2020年度 東京支部奨学事業報告

東京支部国内奨学生報告

東京支部国内奨学金(通称チャレンジ奨学金)は、女性で2年以上の就労経験の後、大学に学ぶ3年生1名を支援する奨学事業です。奨学金は20万円です。今年度の応募者は1名でした。応募書類を評価して、奨学生にふさわしいと全委員の意見が一致しました。

登尾 泉美さん

(慶應義塾大学看護医療学部看護学科3年)

本号表紙の通り、1月の支部委員会にて贈呈式を行った登尾さん。文章をもってスピーチをお伝えします。

●登尾さん誌面スピーチ

この度はチャレンジ奨学生に採用頂きまして、大変嬉しい気持ちと同時に、皆様にご心よりお礼を申し上げます。

私は、2005年に慶應義塾大学(理工学部)、2007年に慶應義塾大学大学院(理工学研究科)を卒業し、その後は民間金融機関2社と政府系金融機関1社の3社で、海外取引を担当していました。当時は、このまま順調に金融業界で働いていける、そう信じていました。

しかし3社目の時に、結婚・出産という人生の大きな変化に直面した他、義理両親が癌や脳梗塞などを発症して、大変ショックを受けました。また、東京のビル街から神奈川県茅ヶ崎市に転居し、平日昼間の街中を歩いてみて、日本の高齢社会の到来を認識しました。この先もさ

らに高齢化が進行し、義理両親のように疾患を抱えて暮らす人々が増加する中で、「何か私にできることはないのだろうか」「最後の時までその人らしく暮らせる仕組みが必要なのではないか」と考えるようになり、金融から医療福祉分野へのキャリア転向を決断しました。

私は5年前より、連合自治会の役員として地域活動に関わっています。実は茅ヶ崎市は、男性の老衰死が全国1位、女性が2位であり、年間医療費も全国平均を大幅に下回っていることから、健康長寿の町として知られていますが、その理由には様々な要因がありますが、私自身は、活発な地域活動、住民同士による共助の意識の高さが影響しているのではないかと考えています。将来的には高齢化、人口減少、そして緊縮財政が想定される中、自助や公助に加えて、地域コミュニティの強化を通じた共助の仕組みが重要になるだろうと私は考えています。

私は今後、地域コミュニティ論や地域保健等を学び、将来はこの分野で貢献していきたいと考えています。今後とも、私の目指すべき目標でいらっしやる皆様からのご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願いいたします。

東京支部国際奨学生報告

東京支部国際奨学金は、日本以外の国籍を持ち、その国の高等教育機関に学ぶ女性2名に、年額4万円を正規の卒業まで支給するものです。日本側の推薦者と奨学生が連絡できることを条件として、奨学生との交流も心掛けています。

昨年度でミャンマーのサル・ギー・ムーさんは、卒業につき支援は終了しました。

《バナッサ・ユバネス・マサムロックさん》
フィリピンのマサムロックさんを引き続き支援していきます。



●近況報告

こんにちは！皆様お変わりありませんか。私も元気で勉学に励んでいます。オンライン授業はデジタルに強くないので緊張します。特に友達に会えないのは寂しいです。通信トラブルもありましたが、あきらめないようにしています。今はとにかく我慢して学生の責務を果たしたいと思っています。

本日に厳しい年でした。毎日常に新しい状況に対応する必要があると感じました。しかしオンライン授業にも慣れ、新しい友人関係も構築できました。コミュニケーションはオンラインに限られていますが、意思疎通ができるだけでも幸せです。教科の学習だけでなく、オンラインのノウハウも学ぶことができました。今は2020年度後期に向けて準備しているところです。大変ですが、神様がともにいることを信じて頑張っています。勤勉こそ成功へのカギです。学費支援を通じて見守っていただけて感謝しています。ともにいて下さるから困難

にも立ち向かえます。夢に向かって進むことができます。ありがとうございます。(ボンカムドン：ピラリン語のありがとう)！皆様に神のご加護を！
(山崎登美子氏和訳)

《ピュ・プイン・マイさん》

9月の募集に際し、ミャンマーのピュ・プイン・マイさんを奨学生に選びました。彼女はマウビン大学英文科1年です。住んでいる村はライフラインも不十分な無医村で、彼女は将来村の保健分野で働きたいそうです。現在は、ヤンゴンで新型コロナウイルスのためのボランティアをしています。次号に近況報告を掲載します。

JAUW国内奨学生について

本部の国内奨学生の募集と一次選考は、各支部に一任されています。東京支部では、6月に募集書類を47大学へ送付しました。8月末の締め切りには19大学から21名(一般奨学生15名、社会福祉奨学生3名、安井医学奨学生3名)の応募がありました。一般は支部選考委員の選考を経て8名を、社会福祉と安井医学は全員を、支部推薦応募者として、本部へ提出しました。本部選考と理事会承認を経て、東京支部からは、次の4名が奨学生と決定しました。

・一般奨学生

- 張 米(東邦大学大学院修士課程2年 薬学研究科)
- 森 遥(北里大学大学院博士課程1年 理学研究科)

・社会福祉奨学生

- 記伊実香(早稲田大学大学院修士課程2年 社会科学研究所)
 - 尾澤佳奈(学習院大学4年 文学部)
- (支部委員 坂上栄美子)



私の先生



ユーモアと
ありがとうを
忘れずに

鷺崎 千春

もう50年余り前のこと、私はキヤノン株式会社就職し広報宣伝課に配属となった。その時、隣のセクションで、バリバリ仕事をこなされていたのが、樋口恵子さんだった。キヤノンの優秀な技師でいらした夫君は、幼い一人娘を残して急逝し、会社からここで働くことを勧められてと伺う。山好きの仲間が多く週末は秩父や尾瀬によく出かけた。そんなスナップ写真を見て樋口さんから一言、「折角カメラの会社に入ったのだから、一番きれいな自分に撮ってもらおう工夫をね」。

月日は流れ、新聞やテレビで、評論家 樋口恵子氏のお顔を拝見する機会が多くなった。そして2008年、JAUWシンポジウム「ワーク・ライフ・バランスをめぐって」のパネリストに、NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」理事長 樋口恵子氏をお迎えした。樋口理事長のお話は、歯切れがよく活気に満ち、むずかしい内容もユーモアたっぷりであり面白く、



歳末名物「女たちの打ち入りシンポ」での樋口氏(左端) 2018年12月

そしてデータをよく覚えて示されるので大いに納得できる。これまでも、男女平等社会の実現、介護保険制度の導入、高齢者介護の現場、認知症と生きる、高齢者と災害など、世の中の動きに先駆け、大事な課題に取り組まれている。2010年、磐田市男女共同参画センターの招きで来静された。「人生100年すべての人に場所と出番を」の講演で、老いの中にも喜びを見つけその人らしく生きたいとの想いに共感し、入会させていた。樋口さんは、多くの病氣も持ち前の気力と使命感で乗り越え、

人生の道しるべ
となった女性

向後 紀代美

人とのふれ合いを大切に、話し合いと実行力で問題を解決へと導かれる。時にはたっぷり主婦感覚を働かせてくださるのも嬉しい。4年前にふとしたことがきっかけで、「キヤノン会」を企画するようになった。「こうしてお仲間と、一日1回、しっかりお食事をいただくのはとても体にいいの、ありがとう」と喜ばれた。樋口さん、またお誘いします。どうぞお元気で！
(タイトルは「ケアされ上手」談から)

遠くに輝く灯台のように私の人生の道しるべとなった女性は、中根千枝さん。終生の先生である。直接講義を受けたわけではないが、はじめての「出合い」は大学入学直後『未開の顔・文明の顔』というご著書の中。

著書のなかで中根さんは書く「あまり人の行かないインド辺境に行き、様々な人々の姿を見た。はじめは強烈な刺激と神秘への好奇心で夢中に過ぎていった。しかし、やがて神経がぐたくたになり、自

分の常識が片っ端から無力となる不快さを味わわれる。だがヒマラヤの涼風が吹きだすようになる、激しいトレトレーニングの後のような快感がやってきた。私はインドを理解し始めたのだ」。

私をわくわくさせたのは、象に乗って、虎狩りにいくシーン。野生と文明の魅力を兼ね備えたインド人地方長官との出会いだった。そこからインドの行政構造の優れた点を解明。

社会組織の本質に迫るその視点は、後に日本社会の時代を超えた特性を明らかにした『タテ社会の人間関係』を生み出すことになる。五〇年以上にわたる百七十万部のベストセラー。

大学から、さらに大学院に進んだのは、間違いなく、中根千枝さんの影響だった。大学の教員になってチベットの行こう、と考えた。中根さんに始めてお会いしたのは、東大で修士論文を書いているとき、会った場所は東工大の川喜田二郎先生の研究室。小柄な体にカナリア色のセーター、民族調のペンダントが印象的だった。その後中根研究室や喫茶店などでお話を伺う機会もあった。「なぜ結婚されないのですか」との問いに「台所仕事と研究の両立は難しいので」との答であった。

女性初の東大教授、学士院会員、さらに学術部門で女性初の文化勲

章受章……。それ以上に魅かれたのは、先生の暖かい人柄と偏見を持たない考え方である。大学院在学中に結婚した私は先生とすこし違った道になった。しかし、研究者になり、活躍の場を海外にもったことは、間違いなく先生の影響だったと思っている。

生き方の指針

菊池摩耶子

私は小中学校を大学の付属で過ごし、学校の勉強は納得のいくまで調べ発表する形式が多く、委員会活動、部活等も活発にやるような環境にあった。高校では大学受験の為の授業に代わり、これは受験に大事だから覚えるようにという言葉が日常言われ、テストの成績が廊下に張り出され、それがすべてのような環境を私は常に疑問に思っていた。

大学卒業後就職、五年後結婚し長男を出産、二年後に渡米した。長男が五歳の時に、知人からギフテッド(Gifted)クラス(IQ120以上、さらに語学力、表現力等の基準を満たした子供の特別クラス)を

受けることを勧められ合格し入学した。私たちの住まいは日本人が少なくジュウエイツシュ(ユダヤ人)が多い場所で、小学校はニューヨーク市の主催するテストで毎年三位以内、授業内容は興味深く、私が付属で受けた授業に似ていた。毎年二回ほど課題を出され、そこから興味ある質問を選択し調べ、最後にそれに関連したものを作るとして提出しクラス全体に発表。劇の発表会が年一回あり、脚本家の父兄が脚本を書き、オーディションで主役を決めるなど多彩だった。子供たちは様々に創意工夫して発表。私は目を見はる思いだった。図書館で課題を司書に見せ相談、私もいろいろ勉強になり、考え方やものの見方を鍛えられたように思う。その後担任に社会の授業で日本をやるので協力してくれと言われ、食べ物についての時は伝統食として、太巻きを、現在子供たちが食べるものとしてコロッケをクラス全員に用意し説明、別の日は着物物を自分で着て見せ、亡くなった時の襟の合わせ方、日本のお風呂などについて説明した。子供たちの好奇心旺盛ないきいきとした笑顔は私に勉強とはこれなんだと改めて認識させた。覚えることも大事だが、興味あることは自分でコツコツ調べるのが自分の心に残っていく。ニューヨークでの子育ては私に生き方の指針を教えてくれた。

学ぶ意志があれば みんな先生

木村和子

私の先生といえは、まず学校の先生を思い浮かべる。そして、今の自分なりの考えで歩いて来た時間を振り返り、学ぶ意志があれば、それは皆先生なのではないかと思っている。

私は、小学4年の時、広島から東京へ転校した。その最初の日、先生は、生徒たちの前で私の頭にやさしく手を置き「勉強もなんでも頑張ってお友達だから……」と言って、私を紹介してくれた。その言葉で、私は転校の心細さも消え、今の親友ともすぐ仲良くなった。6年の時の担任は、新卒で教科だけでなく万能の女の先生で、卒業式では手作りの袴を履いて臨まれた。最も印象に残っているのは、美しい字だった。自分のノートも一生懸命に先生の字の特徴を真似て書いたものだ。中学1年では、当時の二枚目俳優の岡田英次似の数学の先生に褒めていただきたくて、沢山のライバルがいたのだが、代数のテストを頑張り、何かとアドバイス等も頂いた。高校生活は、中学

からの思春期状態を引き摺っていったこともあり、その解答らしきものを求め、漢文を選択した。3年間、書道と共に指導してください。熱心な先生だった。漢文は、今はすっかり忘れてしまったが、あの時期求めていた答えを、一生懸命学んだ中で見つけたように思う。大学は、入学と同時に思春期の暗いトンネルから抜け出た感じの時期で、比較文学という島田謹二先生の格調高く魅力的な講義に心が揺さぶられ、学問的な興味と「人生」についての関心に一層傾いていった気がする。

学校生活を卒業し、80歳を前に、なんと沢山の方々から学ばせていただいたことかと思ひ返している。男女の違いも、年齢の差も、積んだ知識の量も、知を育むことへの壁にはならないのではないか。大学女性協会での出会い、活動、源氏講読も貴重で豊かな学びの場となっている。感謝があるばかりだ。

積極的な

生き方への導き

菊地 康子

私の生き方に大きな影響を与えてくださった人と呼べる先生に出

会ったのは68歳の時でした。老後をどのように過ごしたらよいのか迷っていた時、「私が習った先生から私自身の生き方が変えられた。人はいくつになっても学べるし、いくつになっても成長できる」と娘に紹介された。さっそく大学の生涯学習の学びに参加し授業を受けることにしました。先生と呼べる人には多く出会ってききましたが、今までとはまったくタイプの違う先生でした。まず人を性別・年齢によって分け隔てされないことに驚きました。「学びの場に様々な年齢の方がいた方が若い学生にとっても助けになるのです」と言われ快く受け入れてくださいました。学生には自分の意見をはっきり言うこと、自分に自信を持つこと、何事にもなぜと疑問を持ち真実を知ろうとすること、と指導なさり、私にも同じように求められました。温かく厳しい指導のお陰で楽しく新しいことを学び、見聞を広げることができました。世の中の出来事にも注意深く関心をもち、社会の一員としての役割を担うことの大切さも自覚しました。これから続くであろう生き方に大いに自信を持たせてくださいました。娘の推薦通り、私の生き方が変わりました。自信がなかった私ですが、積極的に何事にも取り組むようになりました。ありのままの自分を受け入れることができたのだと思います。いくつになっても生き方は変えられる

のだと実感できました。また新しいことを学ぶ楽しさを教えてくださいました。学んだことを実践する喜びをも教えてくださいました。一番心に響いたことは「人を差別しない」ことでした。その人をありのまま受け入れる寛容な心を学びました。人と人の関係に欠かせない大切なことです。先生との出会いが用意されていたことに感謝をしています。

「積雪生光」

書への誘い

端本 和子

結婚と同時に夫の転勤先の神戸

に住むことになったのは40年以上前のことです。親戚・友達もいない地で随分と淋しい思いをしました。そのような時に子供の幼稚園のママ友のご縁で書道の先生を紹介され、通い始めたのが、日展会友の國川吉祥先生でした。

書は小学校から大学まで続けておりましたが、日展などには関係のない書の教室でした。

初めてお教室に何うとお弟子さんの方々のみな読売・日展に出す

2×8の大きなサイズの書を書かれています。その迫力に驚き、縮こまっていると先生は何と小学生の字の手本を私に書くように言われました。それから、1年間、義務教育の漢字とひらがなを做い続けました。

1年後、やっと中国の「孔子廟堂碑」虞世南の臨書が始まりました。唐の時代に孔子廟堂が作られましたが、その記念碑の拓本です。美しく優しい楷書です。行書は王羲之の「十七帖」、草書は張瑞珩・王鐸の作品。お習字から書道への世界に導いていただきました。

父を亡くしていた私は先生を父のように思い、先生から書の世界から、人間としての生き方も教えていただきました。人間はなかなか思うようにならない。子供も思うようにならない。また、日展などでも賞は取れない。人間は賞や出世のために生きているのではないと。

東京へ帰ってきてからは書道塾を開き、その後、東京外語大の留学生センターで20数年間、留学生に書道を教える機会もいただくことができました。

それもこれも先生が小学生の字を1年間做わせたこと、「孔子廟堂碑」の美しい美しい楷書を叩きこんでくださったからできたことでした。先生が亡くなってから色紙をいただきました。そこには「積雪生光」と書かれています。雪が積もると自

然に雪は輝く、それと同じで努力を
している。と自然にその努力が輝く
という意味です。これからも師の教
えを守り、努力を続けていこうと思
います。



色紙 積雪生光 國川吉祥書

エスター・ローズ先生

野瀬 久美子

私は5歳の頃、ピンク色の木綿の
生地にもスモック刺繍をしたワンピース
を、とても気に入って着ていた。こ
れは母が、普連土女学校のお裁縫の
授業で、ミス・ローズ(ローズ先生)に
習って縫ったものだそうだ。食事に
は、「じゃがいもパン」というハン

バーグステーキの生地として、馬鈴
薯を摺りおろしたものを使ったもの
が供されて、これもとても気に入
りのメニューで、やはりミス・ローズの
お料理の授業で習ったものとのこと
だった。私が入学した時に、学園長と
して面接をして下さったのは、母が
敬愛するこのミス・ローズだった。

エスター・ローズ先生は、
1917年21歳の時に、フレンド派
の宣教師として来日されて学園で
教えられ、途中コロンビア大学で宗
教教育の修士号を取得された。

太平洋戦争後は、すぐに日本に戻
られて、困窮している日本人の為に、
食糧や衣料、医薬品の支援を米国公
務省に要請され、「ララ救援物資」と
して届けるフレンド奉仕団の責任
者となつて活躍された。やがて普連
土学園長としての重責を果たされ、
津田塾大学や、国際基督教大学の理
事としても貢献されていた。

更に、ヴァイニング夫人のあとを
継がれて、当時の皇太子殿下や皇后
陛下の英語の先生としての役割も
担われて、「皇居に行つてきます」と、
楽しそうに皇居に向かわれていた。

先生が米国に一時帰国されている
時に、米国に留学中だった私は、ご
自宅に招いて頂き、リラックスされ
た先生のお姿に接する機会を頂い
たことは、とても嬉しかった。

背が高く、威厳のある雰囲気にと
ぐわないうような、一寸巻き舌の先生
の日本語と、率直な態度や、柔らか

い笑顔は、現在も卒業生の心の中に
生き続けていて下さる。

こうしてお若い時から独身を通
され、日本での教育に心身を注いで
下さった先生を、終始温かく応援さ
れていたペンシルヴァニア大学教授
で、外科医でもいらした弟さん、ジヨ
ナサン・ローズ氏のお姿も忘れられ
ない。



本を持つ野瀬さん



ローズ先生

信念の人

藤村 久美子

「何よりも大事なことは、自分自
身に対して忠実であること。そうで
あれば、夜が日に続くように、誰に
対しても忠実になれるものだ。」
シェイクスピア『ハムレット』から

これは勤務していた大学の卒業
アルバムに担当したゼミ生に送る
言葉として引用した言葉です。教
育は人格形成に関わる営みで、知
識や情報を獲得することではな
く、一人一人が生きていく上での信
念を見出していく過程だと私は考
えてきました。知識や情報は特に
今の時代ではある程度自学で得ら
れるが、物事をよく吟味し、判断
し、そこから自分の考え、意見を深
める習慣を養うためには学び合う
仲間、そして適切な学習支援を行
う先生の存在が重要です。このよ
うな体験を重ねていく中で、自分
の軸となる価値観を模索し創造し
ていくことが教育ではないでしょ
うか。そう考えると、学生の教育に
携わる先生こそ日々の言動を通し
て、信念を持つ、一貫性のある人間

としての模範を示すことが求められると思います。

以前JAUWの会長を務められた山本和代さんは、正にそのような「信念の先生」でした。山本さんは1995年に私が勤務していた大学に社会教育学の教授として招かれ、たまたま研究室が隣同士でお昼をご一緒しながら様々なことを語り合う中、親しくなりました。また、JAUWの会長になられたとき、会員になるよう勧めてくださいました。

強い責任感を表し正論を述べる方で多くの教員の信頼を受け、就任後間もなく学部長に選出されました。しかし、多くの上層部の男性にとつては煙たい存在であったことも事実で、相当苦労されました。それでも、動揺せず、常に平然とした態度を示されました。「付度」「事なかれ主義」「本音と建前」は全く彼女に通用しない概念でした。人間・女性・教育者として、筋を通す凛とした姿勢を示してくださいました先輩先生でした。

私が管理職に就いたころは既に退職されており、貴重な助言を求めることができませんでした。しかし、心の中では今も目指すべき「自分自身に対して忠実である」「人間のロールモデルとして山本さんは存在し続けています。

老後に出会った

二人の先生

岩村道子

定年退職するまで私は大学という「先生がいっぱい」の世界に住んでいました。その世界では「先生」と呼んでいけば、お互い平等であることを認識でき都合なことが起こらない便利さがあります。その世界から退いた今、私にとつての先生は「身体を使つての表現法を教えてくださいな人」で、それは歌の先生とダンスの先生です。

私は小学校の頃から音楽と体育は苦手でした。生まれつき嫌いというわけではなく最初は嬉々としてやっていました。気が付くとかけっこはビリだし歌えば際立った音痴でした。誰よりもだめで劣っているとわかる自分からダメな子供の位置に居座ってしまいました。そんな私が還暦のころ小学校時代のクラス会で音楽家の友人に「あなたは歌が歌えて羨ましい。私はストレスでいっぱい穴を掘って叫びたいとよく思うの」と話しました。その友人から「誰でもできる素晴らしい発声法を教えてください」と声がかかり呼吸法、ハミングなどの基礎

訓練を繰り返しているうちに、いつの間にか歌える声が少しは出るようになりました。合唱団にも参加して毎年サントリー大ホールでの演奏会に出演してきました。コロナ禍で昨年の演奏会は中止でしたが、歳末恒例の「第9合唱」を聞くとは度かこれに歌えた幸せをしみじみ感じました。

スポーツ実技を避け続けていた私は定年直後、定年鬱にならないために覗いてみた社交ダンス教室でダンスにトランプされてしまいました。運動とりわけダンスなどは私にとつて全く異次元のものでしたが、あまりの別世界に鬱を忘れることができました。スキップはおろか駆け足もまともにはできないと先生に呆れられながら、めげずにレッスンに励んでいます。とんでもなくド派手なドレスでラテンダンスを踊るのも楽しみの一つです。踊るために必要な筋力と気力そして体の使い方を知ることにより種々の踊りの見方も変わりました。

私がこの二人の先生との出会いで実感していることは、親切丁寧に指導してもらえばその道の能力や資質ゼロでもある程度はできるよくなるという事です。身体を使うことの限界が目前の今、今後は何の先生を見つけようかと思案中です。

衆人皆師

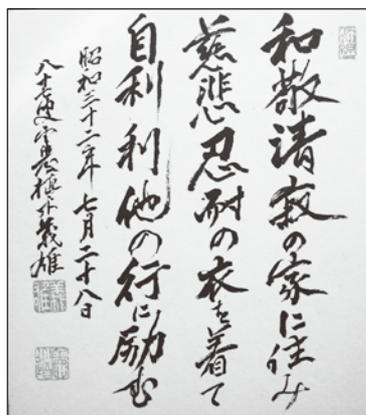
辻英子

一九五七年三月、大学の卒業論文『日本霊異記研究』の構想を練るために私は北鎌倉の円覚寺寿徳庵に数日滞在した。ひと日、雲岩寺第五八代、植木義雄老師(当時八七叟)が庵に立ち寄せられた。禅宗史の権威・玉村竹二教授と雲岩寺開山山仏国師遠年忌記念出版の打ち合わせのためであった。老師は玉村先生に偶々居合わせた私の研究指導を熱心に依頼され、私は驚いた。その後東京大学の史料編纂所に先生をお訪ねしたところ、「僕では分からないから」と、同僚の日本漢籍史の第一人者太田晶二郎先生に紹介された。太田先生の峻厳なご指導ぶりは世に鳴っていて、研究を断念してしまつた人もいたという。初対面の日、太田先生は棚から何本かの巻物を取り出され、この上下の凹凸は何か、とお訊ねになった。それは流寓先の京城大学に敗戦後も留まり貴観本をひたすら筆写し続け、減量のため空白部分を裁ち落とした跡であった。リュック一つで最終の帰国船で東京大学に戻られた。

指導教授の久松潜一先生は東京大学退官、慶應の専任となられたので、私は同大学院に進んだ。先生は学位論文『日本文学評論史』三冊により帝国学士院賞を受賞。この原稿は本郷の坂を荷車で運んだとか、大学でノーネクタイに気づかれた先生は急ぎネクタイを買求め授業に臨んだところ講義中には二本になったとかの巷説も、にわかには信憑性が増してくる先生は敬愛の的であった。栄光の道を歩まれた先生は「年々去来の花を忘れず」の句を愛した。日中印比較説話研究に携わり、その道の先覚者松浦貞俊先生や塚本善隆先生、奥野信太郎先生のご愛顧に浴した。奥野先生から玉村先生とは従兄弟どうしであるとうかがったが、対蹠的なお二人である。辻直四郎先生と中村元先生の教えも受けた。

退職（七六・五歳）後、駒沢オリンピック公園の散歩をするようになってから八年余になる。毎朝散歩の途次にごそばを交わすようになった一人に中島さんがいる。月や星、日の出を眺めたり、さりげない一瞬を重ねた。母の背で聴いた「三日月様こんばんは」の歌を一緒に歌ったりもした。小春日和の日、中島さんは風のように旅立っていかれた。報道によると、中島兵太郎（一九二二—二〇一七）デジタルオーディオ技術の草分け的人物。CDの父。カラヤンとも旧知の方であった。

一九八〇年五月七日に、高村象平先生（夫の指導教授）が我が家の記念帖に遺してくださったおことは《衆人皆師》は、公園に参集する人々から私への無言の言伝でもある。



右は植木義雄老師の色紙。「おくのほそ道」に芭蕉も訪ね「啄木（きつつき）も庵（いほ）ははやぶら 夏木立（なつきだて）の句を靈巖寺の柱に刻んだ」という。



1960年大学院修士修了式で後列右から3人目が久松潜一先生、小泉信三先生からは「早く博士になりたまえ」と。前列右 筆者。

すべての経験を糧に

宮下 摩維子

学生時代、それから社会人となつた今でも多くの尊敬する先生方との出会いがあった。学部時代、進路を迷っていた時に、大学院はイギリスの修士課程に進んでみたらどうか、あなたならできると背中を押してくださったイギリスの語学学校の先生。留学中だけでなく、今でも私の論文にネイティブチェックをいれてくださる弁護士の先生。この先生は、弁護士であると同時に語学学校の教員でもあり、さらに俳優もこなす方で、英語論文を執筆する際にはいつも語学・法学の両面から助言をくださる魅力的な先生である。先生と生徒という垣根を超えて、今でも私を支えてくださる。思い返すと、数えきれないほどの恩師に出会って、途を示していただいている私は、本当に恵まれているのだろう。だからこそ、どの先生かお一人に絞ることはできなかった。

本当にそのような「先生」だけが私の先生だったのだろうか。私は今まで色々な経験をし、その度にカルチャーショックを受け、社会を新し

い視点で見られるようになった。そういう経験をやる中で知り合った方全員が私の「先生」ではないだろうか。中学生で初めて海外のサマースクールに参加したとき、初日にはあまりにも大人びてみえる欧米のクラスメイト達に怯え、母に泣きながら電話をした。しかし、次の日からすっかり仲良くなつて、それ以来、海外のニュースをみると友人のいる国だと思ひ、それまで遠かった世界が小さく、身近に感じられるようになった。大学生のときに参加していたボランティアサークルの活動では、児童保護施設や少年院で子供たちに勉強を教えたり、合唱発表の練習をしたりした。恵まれない家庭環境によって十分な教育を受けられず、でも実際には教育の機会を心から望む子どもが身近にいることを知り、実質的には不平等が存在する社会で自分は何ができるのだろうかと考えようになった。こういった様々な経験も私にとって、人生の「先生」なのだと思う。

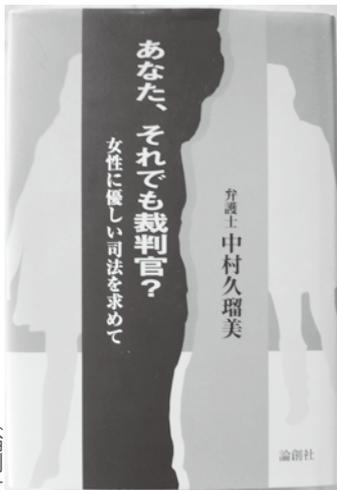
会員である母が大学女性協会での活動を通じて得難い経験を積んできた姿を見てきた。私も大学女性協会に入会を許され、今後の活動を通じてたくさんの「先生」との出会いを大切にしたい。



自著紹介

『あなた、それでも裁判官？』

中村久瑠美



(論創社)

女性に優しい司法を求めて

知的なたたずまいに惹かれて結婚した夫は、東大法学部を出た裁判官。二人で幸せな家庭を築いていけるはず、だった。ところが、夫は男尊女卑は当然という男。たびたび暴力をふるう。今から4年以上前で、ドメスティック・バイオレンスなどという概念もない。生まれたばかりの子を抱えて離婚した著者は、女性が虐げられる社会を何とかしたいと、必死の努力の末に司法試験を突破する。

本書で明らかにされるのは今では離婚問題に関する著作などもある弁護士、そんな波乱の個人史だ。著者は司法研修所で見聞きした教官の「女性差別発言」などにも論及。法曹界でも女性問題への意識が低かった時代において、懸命に人生を切り開いていった姿が感

動を誘う。暮らしの手帖社刊)

以上は2009年に発行された同名の著書に対する読売新聞の書評欄に掲載された紹介記事である。それからすでに10年が経った。おかげさまで本書は静かに全国に浸透して完売になり、復刻版をという声をいただくことになって、今回論創社から再出版(2020年7月)した。

いまでこそ女性弁護士の数も驚異的に増えてきたが、四十数年前の司法界は、典型的男性優位社会で、女性の立場や権利を擁護しようという意識はまるでなかった。本書の副題としてつけた「女性に優しい司法を求めて」これは私が弁護士になろう、ならなくては！と決意した原点であり、今なおこれが私の人生テーマでもある。

専業主婦であった私が、思いもかけない夫のDVに遭って、弁護士を天職とまで思うに至った過程に興味を持ってお読みいただけたら、幸いである。が、実はそれだけではない。

今年2月に出版された拙著『女性と戦後司法―裁判官、女性がおわかりですか?』という著作の前編という意味が本書にはある。女性の立場から、司法の戦後史を語るための一環としての役割を本書に持たせたくて、このたびの復刻版を刊行したのだ。

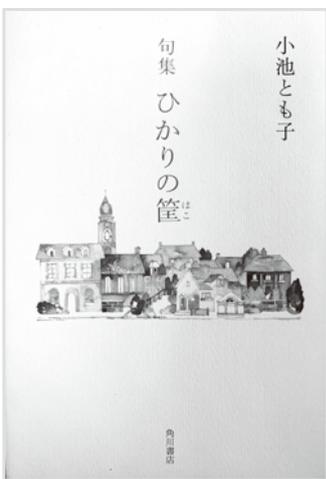
戦後女性史をたどろうという機運が今高まっている。戦後百年が近づくにつれ、各方面から女性の権利拡張の歩みを検証しようという試みが今後でてくることだろう。国民の半分を占める

女性を、司法がどのように処遇してきたかをたどることは、戦後の日本女性の置かれた立場をみる上できわめて重要である。その前編という意味で本書をまずお読みいただけたら、「女性と戦後司法」の実態がより鮮明にご理解いただけるのでは、と考えている。

本書は肩のこらない軽い読み物となっているので、まずは一読をお勧めしたい。

句集『ひかりの筐』

小池とも子



(角川書店)

言葉のひかり

第一句集『ひかりの筐』を昨年三月末に上梓しました。丁度コロナによる自粛生活が始まった頃でしたが、「コロナで鬱鬱としていた気持ちに句集を読み明るくなった」と言われ、ほっとしました。

「未来図は直線多し早稲の花」という鍵和田柚子先生の俳句の世界に憧れて結社「未来図」に入会し、幸い近所に結社の句会があったので月一度通うようになりました。いつか句集を出せたらいい

いなと思っていました。自分の句の拙さは自分が一番よくわかっているのに、躊躇いがありました。

一昨年の秋、句会の師である須賀一恵先生が、「私の最後の仕事として選句をしてあげるから、一日も早く句を纏めて」と仰って下さり、大急ぎで十七年間の句を纏めました。俳壇賞や俳人協会賞を受賞されている須賀先生のお言葉は大変有難く、出版社も先生が電話して下さいました。

句集名の『ひかりの筐』は、「神が開くひかりの筐やいぬふぐりの光」の句から採りました。いぬふぐりの光、花の光、しゃぼん玉の光、噴水の光、あらゆるものに命の光があります。

六月に主宰の鍵和田先生がお亡くなりになり、「未来図」は九月号で終刊、十一月に解散になりました。句集を出す前には想像もしていなかった事が次々に起こり呆然としましたが、「未来図」で学んだ幸せな日々の詰まった句集を残せて良かったと句友達に慰められました。現在は二つの会に入って、句作を続けています。

俳句は自然に参画することから始まると言われていますが、日本には美しい四季があり、その季節の花鳥風月に接して自分の心を詠むのは楽しい事です。同じ場所、同じ物を同時に見ても、それぞれ作る句は違います。他の人の秀句を見て、私は何も見えていないのではとがっかりする時もあります。私にしか見えない世界を探して自分の言葉で詠んでいけたらと願っています。

寄稿

サークル

「源氏物語を読む会」

閉会にあたって

「源氏物語を読む会」を閉めました

講師 坂上栄美子

今から25年前、比留間支部長の時だった。「支部の資金を増やすために、何かサークルを作って寄付をしてもらいましょう」という案が、委員会では出された。私は入会間もなく、隅に座っていた。「あのう、私、源氏ならできませんけど」と言ってしまった。同じく委員の柴崎富子さんが、俳句をされることになり、まず2つのサークルがスタートした。おおよそ文学とはほど遠い動機で「源氏物語を読む会」は始まった。

源氏物語というと、皆さん一度は原文で読んでみたいという思いがあるらしく、突然30人近い申し込みがあった。その後へは引けないと、覚悟を決めた。そのうち、新しいクラスも出来て、10年前に前後して2クラスとも読み終えた。どちらも600時間以上かけて読んでことになる。終わってもお互いに別れがたく、「じゃあ、伊勢物語を」と、また言ってしまった。2年ほどでまた終わってしまった、源氏を再読することになった。初心者向きのクラスも始まったが、私は72歳になっていた。この2クラスには「私は最後までではもたないの、行けるところまで」という約束だった。皆さんお元気、私も元気、だん

だん欲が出て、「源氏が死ぬところまで、私たちも頑張りましょう」と言っていた矢先に、このコロナの騒ぎになってしまった。私も皆さんもさんざん悩んだが、やはり閉めましょうということになった。

閉めるにあたっては、色々思い出す。初めはいやいやだった音読も、そのうちに「やはり源氏は原文で読まないかね」という声に変わる。入院中の友人にテープをとって送る人もあり、「復帰して、スムーズに話に加われました」と感謝されていた。次週読む番に当たっていたのに急逝されて、彼女の段を皆で声を揃えて読んだこともあった。登場人物になり切って、「源氏って、ひどい！」と突然怒り出す人もいた。認知症が進み、夫さんに送迎されながら、最後まで通ってこられた方もあった。私が不案内なことは、研究者を招いて講義をしてもらった。中でも、女性に焦点を置いた当時の政治文化の話は、とかく感情に流れがちな読み方の戒めとなった。

源氏のゆかりの地を訪ねる旅行は、京都、伊勢・南大和、宇治・比叡山と3回に分けて、2泊3日の行程で現地では貸し切りバスを使った。できるだけゆかりの地に近い所に宿をとり、またできるだけ歩いて回った。毎回不思議なほど天気にも恵まれ、訪れた先々のご厚意もあり、思い出深い修学旅行となった。思えば、最初からの方は25年、新しい方でも10年、毎回刺激的な意見や質問が飛び交い、なかなか活発でユニークなクラスだった。

600時間は、長い。読み終えたときは、元気で続けられた安堵が達成感に

変わる瞬間で、「これが源氏物語だったのね」と、皆さん感慨深い様子だ。

物語は、天皇という権威と摂関家という権力の上に成り立つ摂関政治の時代に書かれた。天皇の妻や母の里方が権力を握る時代とは、即ち女性の力が大きく権力に関わる時代でもあった。物語の女君たちは、長い髪といわゆる十二単に包まれてひっそり生きているイメージとは違って、それぞれの立場の中で、苦悩や葛藤しながらも、しっかりと意思を持って生きていく。その生き方が読者を惹きつけるのだろう。千年の時を隔れても、私たちに「自分らしく、しっかりと生きていますか？」と、物語は問いかけてくる。

東京支部には長い間ご支援いただき、ありがとうございます。以下は会員からの寄稿(寄稿順)です。

皆勤病 野次馬病

源氏物語を読む会 II 大島杏子

源氏物語は今は2回目の講読で、2011年11月に始まった。当時30人近くいた会員も今は16人。2回目とあって余裕もあるし、楽しくやっている最中、コロナのせいで中止とは！

1回目は2000年5月から2010年3月で全巻読み終えた。その間4人の仲間を失った。2002年2005年2008年と源氏のゆかりの地を訪ねる旅行をして、親交は深まった。

私は皆勤病、野次馬病という業病を昔から患っていて、源氏は1回しか休んだことがない。野次馬病のせいで、源

氏に関する講演はよく聴きに行った。ある講師は、夕顔、葵上、紫の上の死因は六条御息所の生霊死霊だと断言した。ある講師は女三宮を出家させた六条御息所があざ笑って空に消えて行ったが、今でも彷徨っているかもと冗談を言われた。ある講師は玉鬘が気の毒とおっしゃった。村山りう女史は玉鬘をほおずきのようにきれいな女性と解説していたので、私は玉鬘の登場を待っていた。玉鬘は私は気の毒とは思わない。源氏物語の女性の中では一番幸せではないかと思う。髭黒は彼女一筋だった。源氏、夕霧、匂宮、薫など他の男は全部他の女性の存在があった。わりと早く未亡人になったし、息子はあまり出世しなかったようだが、娘二人を冷泉帝、今上帝に入内させた。その娘たちを夕霧の息子にやったら、万事うまく収まったのと思う。

あの時代の人たちはどうして身分にこだわらないのか、このところは全く分らない！源氏、柏木、八宮、薫、明石の入道も身分にこだわっている。紫式部は現代にも通ずると思うような感性の持ち主だと思いが、やはり身分にこだわったのだろうか！ある本で娘の太式三位は名を捨て実を取ったのか、裕福な暮らしを送ったろうとあった。私は玉鬘は好きだが、六条御息所にも魅力を感じる。あんなに気位の高い女性が夕顔のように身分の低い女性に嫉妬するかなと思う。夕顔はあの荒れた屋敷の物の怪に憑りつかれたという坂上先生の解釈の方がしっくりする。

坂上先生の源氏は、1回目と2回目では解釈が変わったところもあって、

面白かった！
源氏は私の生活の中心であった。拠りどころをこれからどうしたらよいのか？コロナが恨めしい！

坂上先生への感謝

源氏物語を読む会Ⅲ 佐々木澄子

坂上先生が源氏物語の講座を持たれて25年とのことですが、終了にあたり、心よりの感謝と共に寂しい気持ちでいっぱいです。

15年前、東京支部長になったとき、「先輩の顔を知るために」と入会を勧められたのが、先生の講義に出席したきっかけでした。はじめのうちはお休みばかりしていましたが、2巡目の源氏物語の「若菜」からはじまる、源氏が正妻として女三宮を迎えての紫の上の苦悩、「柏木」では源氏、女三宮、柏木の三者の人間模様が描かれ、先生の毎回の講義に付随した蘊蓄のあるお話の内容に引き付けられ、「今日はどんなお話を教えていただけるのかしら」と通う日々でした。また、先輩方との会話も楽しみの一つでした。

柏木が女三宮に出した文を源氏に見られ、源氏の眼力にひれ伏し、死に至るまでの苦しみは、最高の男性と描かれる源氏の怒りを想像し、その怖さはいかばかりかと、私の一番好きどころです。先生が、「源氏を男性の側から見るのも面白い」と言われたことが、心に残ります。

その後、「御法」、「幻」と源氏の晩年を知ると、紫の上を愛しながら身分にと

られ正妻に出来なかつた苦悩、紫の上の死後1年、文を燃やしながら老いの迫りくる中にも、おごそかな源氏のためたすまいが感じられ、先生の講義の中に人生の問いかけをたくさんいただいた至福の時でした。

また、「宇治十帖」もお教えいただき、宇治、石山寺、比叡山に2泊3日の修学旅行に行ったのも良い思い出となっています。ゆかりの地を歩き、石山寺では源氏物語千年紀で、仲間たちと十二単を来て写真を撮



延暦寺根本中堂にて(2008年)

り合つてはしゃいだりもしました。

ここ数年は、前半のお勉強を水曜日のクラスに入れていただき、至るところに後半への伏線があることに気付いて認識を新たにしました。「六条院の馬場」のところでは、横浜市歴史博物館の学芸員の方の講演を計画していただき、見聞を広めました。まだまだ続くと思つていた源氏の講座、残念ですが、またお話を聞かせていただきたいと心より願っております。

源氏物語の講座に在籍して

源氏物語を読む会Ⅱ 長谷川千恵子

私が坂上栄美子先生の源氏物語の講座に入れていただいたのは、20年ほど前、故横田雅子さんに誘われ横田さんのご友人の中山律子さんを通じてのご縁でした。その時点で大学女性協会会員にもなりました。横田さんは源氏物語を愛し、坂上先生の講座を愛し、最後まで源氏物語に心を遣って他界されてしまいました。有明の癌センターにお見舞いした時の明るく前向きな横田さんに望みを抱きましたが、残念ながら望みはかないませんでした。花が好き、山が好き、音楽が好きだった彼女を偲び、講座を紹介されたことを、いまさらながら感謝しています。

坂上先生の授業は単に原文を解釈するだけでなく、広く時代背景や人間関係の妙を説明してくださるので、興味は尽きず毎回楽しみに拝聴してきました。全54帖を10年かけて読み終え、次に

伊勢物語を読んだ後、源氏物語を再読したいという希望が多く、源氏物語の2回目の授業は「藤袴」の巻まで進みました。

最近、私はそれぞれの巻の内容や登場人物もなかなか覚えられないのですが、長大、深淵な物語を丁寧に教えていただくことができ有難く思っております。2002年に京都旅行に始まり、さらに伊勢、大和地方、比叡山、宇治へ旅行を企画、実行して下さったことは、私達にとって大変貴重な体験となり、楽しい思い出となっております。

新型コロナウイルスの影響で講義が休止になり、会場の再開の予定もたえずついに講座解散という結果になり、大変残念に思っております。講座の会場は津田塾大学同窓会室であったので、会場の予約担当として会計の大島さんと連携して、良い経験を見せていただきました。講座のご縁で皆様と貴重な時を共に過ごさせていただいたことは、生涯の宝物となります。再開はほぼはないという状況ですが、今までの有意義で貴重な講義を受けられましたことに心底より感謝しております。

源氏物語を読むきっかけ

源氏物語を読む会Ⅲ 石山純子(一般)

坂上先生の源氏物語に参加するきっかけについて、お話しします。

横浜で大学婦人協会の国際大会が開かれた1995年の前年に、先輩から入会を勧められました。まだ右も左も分からない頃、その先輩から当時の財

務委員会主催の葵祭見学を兼ねた京都旅行に誘われ、ついでに葵祭の説明を聞くようにと言われ、お会いしたのが坂上先生でした。ご説明を伺った後、失礼ながら発したのが、「なぜそんなに詳しいのですか？」でした。当時、聖蹟桜ヶ丘で源氏物語のクラスを持っていたらつしやると伺い、その場で入れていただきました。

先生は、源氏物語を玉上琢弥先生の下で学ばれ、その後もずっと源氏物語に向き合い、『源氏物語ひとりごと』の著書もあります。

2013年からは、東京支部主催のクラスに参加しております。最初のクラスから不連続ながらも今回が2度目の源氏物語で、1回目は「宇治十帖」も読みました。この間には、ゆかりの場所を訪ねる京都や奈良への旅行、美術館での見学、また講師を招いての講演会など、気が付けば相当な源氏通？となっているはずで。

今年でクラスが中止という残念なことになりましたが、一人では到底読み切れない大作を、多方面から触れることができましたのは、ひとえに先生の源氏物語への情熱であり、その結果私どもの宝物となりました。坂上先生、心豊かな人生をありがとうございました。

豊かな人生をありがとうございました

源氏物語を読む会 三浦由紀子

パンデミックのさなか、源氏物語を読む会も、その他すべて、休講や中止などで、専ら家の仕事に明け暮れ、庭仕事に精を出しています。一昨年から増え

たことがあります。それは蓮と睡蓮を育てはじめたことです。きっかけは、「読む会」3度目の旅行「宇治十帖」の物語を歩いたときのことです。

京都は源氏物語千年紀で大賑わい、特に宇治は全体が様々な企画展示などであふれ、歩き班とタクシー班に分かれ、宇治の街を隈なく歩き、物語の世界に浸りました。

宇治川は思っていたより大きな流れで、ここに架かる宇治橋の袂にある橋寺での印象をずっと引きずっています。入水したが救われた女君、悲恋の物語なのに、今は恋愛成就の寺として若い女性の参拝が絶えないとのこと、宇治市のホームページにも紹介されていますが、私の関心は、庭にあった蓮の鉢植えです。数は数えなかつたけれど、いくつか数鉢を並べ、あの独特の清浄さを感じてみたく思っていました。数年前から、京都の業者さんからDMが届くようになり、昨年から実行、全ての材料を購入し、着手しました。大甕、田んぼの土、赤土、苗、肥料。力のいる仕事で、限界を感じるが、昨夏は見事に、清浄さを発揮してくれました。

JAUWの会費会員に過ぎなかつた私に、同窓の先輩平田さんからお声をかけていただいたのが「読む会」でした。すてきなメンバーばかりで、人生の目標がここにあると思つたものです。いつの間にか25年も経ち、目標と仰いだ方々の年齢になってしまいました。理想と描いていた像には及ぶべくもない現実ですが。

香道にも親しんでいたので深い深い感動をもって、着席させていただいた

つもりですが、講師席からご覧くださった生徒には、菌痒い思いもあつたことでしょうか。よく辛抱して導いてくださいました。先生のオリジナル資料、数々の雅な企画へのお誘い、人生を豊かにしていただきました。ありがとうございます。

サークル案内

● 水墨画教室

- ・第二金曜日
午後一時半～三時半
- ・JAUW事務所 会議室
- ・講師：日高絹子(絹紅)会員
- ・連絡先：森川淳子
☎(045)583-3430

2020年度(7月～3月) 東京支部新入会員

- 宮下 摩維子 (早稲田大学)
- ロンドン大学大学院修士課程)

*敬称略 *括弧内は出身校

お悔やみ申し上げます

- 玉井 美枝子 様
- 2020年7月16日ご逝去
- 安威子 様
- 2020年9月ご逝去

**ご寄付いただきました
ありがとうございます**

源氏物語を読む会 Ⅱ

50,000円

源氏物語を読む会 Ⅲ

15,000円

水墨画教室

5,000円

- 加納孝代 吉村光代 進士多佳子
- 縄田真紀子 加藤恭子
- 藤谷文子 長谷川瑞穂

1,012,000円

*敬称略

支部からの連絡

- 住所等の変更はお知らせください。
- 会費未納の方はお早目にお願ひします。
- 91歳以上の会員の会費は免除することができます。
- 支部長までお申し出ください。
- 中野区視覚障害者福祉協会支援のため使用済み切手を事務所までお送りください。

《編集後記》

沢山の支部会員のご協力を頂き、『ともしび69号』を予定通り発行できますことを感謝いたします。

投稿は投稿順、表記は筆者の原稿を出来るだけ尊重いたしました。ご感想をお待ちいたしております。

(嶋田・進士)